

8 黒潮ルートの根栽農耕文化 —台湾・フィリピンと琉球弧の島々—

橋 本 征 治
Seiji HASHIMOTO

はじめに

東南アジアにおいて最も古いタイプの農耕が発達したことは、サウアー (Sauer, 1984, 56-57) やコーエン (Cohen, 1977, 88-105) らが等しく認めるところである。その中核をなす作物は、ヤムイモ・タロイモ・バナナ・サトウキビなど、根分け・株分け・挿し芽などによって繁殖する栄養繁殖作物群で、中尾 (1966, 35-39) はこれらの作物群を中核作物とする農耕様式をもって根栽農耕と呼んだ。なお、地域によってはそれらにサゴヤシ、ココヤシ、パンノキなどが加わる。この農耕様式は東南アジアから、西方に向けてはインド洋沿いにマダガスカル島やアフリカ大陸方面へと伝わり、東に向けてはインドネシアやフィリピンの島々経由でメラネシアやミクロネシアの島々へ、さらにポリネシアへと伝わったとみられる。そして、今一つはフィリピン経由で台湾、そして琉球弧の島々へという黒潮ルートとも呼ぶべき伝播経路が拮定されている (図1)。ただし 湿潤熱帯・亜熱帯アジアにおける根栽農耕は、その後北縁の照葉樹林帯で二次的に発生した陸稲を中心とする焼畑雑穀農耕の影響を受け (佐々木, 1970, 10-15)、さらには灌漑耕作される水稲作の普及によって衰退した (Harris, 1973, 75-9. 渡部, 1983, 29-47) とみられている。しかし、一部の地域ではかなり新しい時代まで根栽農耕体系が継承され、中には今に引き継がれている地域もある。後者に該当する地域としては、アジア東部ではフィリピン、台湾の一部、そして琉球弧の島々などが挙げられる。

次に、その中核的作物の一つであるタロイモについて触れておく。タロイモの栽培起源地も東南アジアと拮定され、その東方に向けての伝播にはいくつかの経路があったものとみられるが、その経路はいずれも先の根栽農耕の伝播ルートとほぼ重なる。したがって、タロイモは根栽農耕の指標的作物の一つとして重要な意味をもつともい

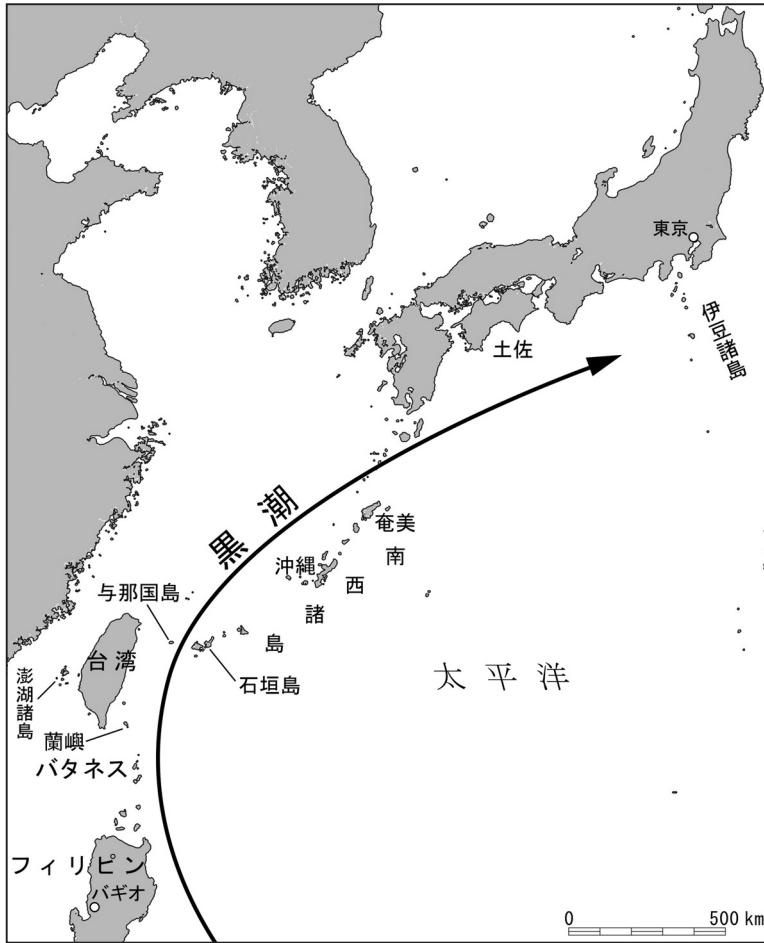


図1 黒潮ルート

えよう。なお、このタロイモの伝播経路について、各地域のタロイモの染色体の数の差異を検討したイエンら (Yen and Wheeler, 1968, 259-267) は、28 染色体 (2 倍体) と 42 染色体 (3 倍体) をもつ 2 系統が琉球を経て日本、そして今一つはチモール → ニューカレドニア → ニュージーランド方面へと波及し、28 染色体の一系統がメラネシア → ポリネシアへ伝播したと推定したことを付け加えておこう。

この黒潮ルートに関連して、佐々木 (2003, 5-7) は、根栽農耕の主要な作物の一つであるタロイモが蘭嶼 (Lanyu, 旧紅頭嶼) では盛んに栽培されているのに、バタン諸島 (Batan Is.)・台湾島・先島諸島ではあまり見掛けなくなっていること、ヤマイモはタロイモとは逆の栽培分布パターンを示すこと、台湾島と蘭嶼・バタン諸島の間ではアワのモチ性へのこだわりがみられることなどをあげて、八重山諸島

と台湾山地・東部低地との間、台湾山地・東部低地と蘭嶼・バタン諸島の間には文化の断層、あるいは非連続な部分が認められることを指摘している。いっぽう、他の文化要素はそれとは異なった様相を呈している。そこに、連続と非連続とが交錯する複雑な文化交流の様相が浮かび上がってくることになる(橋本, 2007, 56-57)。それに関連して、筆者は琉球弧の島々におけるサトイモ類栽培においても、熱帯性作物で灌漑耕作される田芋を主として栽培する田芋栽培圏と、温帯作物で畑作される里芋を主として栽培する里芋栽培圏とがあり、トカラ列島辺りが儀礼等も含めたところの両文化圏が交会する地域となっていることを示唆した。また琉球諸島内の田芋やヤムイモの栽培分布においても非連続がみられることを先に指摘したところである(橋本, 1994, 67-106. 改めて第4項で触れる)。

確かに、現象的には根栽農耕の構成要素において上記のような空間的な非連続が認められる。しかし、根栽農耕が廃れたかにみえる地域でもサトイモ類が栽培されたり、レリクト作物として遺存しているケースが認められることを無視することはできない。例えば、現在ではサトイモ類が商業的に栽培されている台湾の屏東・高雄・花蓮・台東や先島諸島では外来種が多く導入されているが、一部に在来種が栽培されたり、農地の片隅に在来種や様々なサトイモ類が遺存しているケースがみられる。そうした状況は、これらの地域でもかつてはサトイモ類が農耕の重要な部分を担っていたことを証言しているようにみえる。いずれにしても、農耕文化の連続・非連続の実態、そして消えたり消えかかっていたりしている連鎖の鎖を繋ぐ作業が、農耕伝播の経路を復原する上で欠かせないことは確かであろう。

タロイモの種に関して、最近の研究(松田, 2003, 147-149)から若干の補足をしておきたい。すなわち、日本で広く栽培されている石川早生群や土垂群などの里芋はいずれも3倍体の温帯性のもので、中国大陸経由で伝播したものとみられ、熱帯地域のタロイモとはその作物特性や形態を異にする面が多く、主として子芋が食されるという。なお、ここでは先稿(橋本, 2001)に倣って、温帯性のものを里芋、熱帯性のものをタロイモ、両者を含めてコロカシア(*Colocasia*)類を総称的に指す場合はサトイモ類と呼ぶことにする。子芋とともに親芋が食されることの多い3倍体の赤芽群は琉球から台湾に(そしてベトナムにも)繋がる系統であり、数は少ないが、親芋が食される2倍体の女芋、唐芋、八頭なども南方系のものとみられるという。このように、日本では主として子芋が食される3倍体のものが多い大陸系のサトイモ類(九州から関東にかけて栽培)と、主として親芋が食され、2倍体のものが多い南方系のサトイモ類(琉球, 台湾, フィリピンなどで)とがあることになるという¹⁾。なお、吉野

(2003, 136)は、サトイモ類の栽培起源地として、インド東北部からネパール辺りを想定し、雲南辺りで二次的な変異を遂げた後、東南アジアや大陸南岸経由で東方に拡散したとみている。

以上の点を踏まえて、本稿では最後に挙げた黒潮に沿った北上ルートについて、台湾、フィリピン、琉球弧の島々という三つの地域の根栽農耕様式に関わる伝播論的研究の一環として、特にその中核的作物の一つであるタロイモに注目しながら台湾（蘭嶼）のヤミ族（*Yami*, 雅美。タオ = *Tao*, 達悟とも）におけるタロイモの種類や栽培様式、関連する農具や儀礼などを中心に、フィリピンのルソン島北部と台湾を結ぶルート上に位置するバタン諸島、および琉球弧の島々の根栽農耕にも言及しながら比較検討を行い、上述の伝播ルートの解明と、そこにみられる文化の連続と非連続、あるいは断続についての議論を深めることに資したい。なお、かなり遅れて伝播したサツマイモについても、同種の塊茎作物ということで影響が大きいので、随時考慮に入れていきたい。

1 黒潮ルートの概要

まず、黒潮ルート（図1）の地理的環境について概観しておきたい。気候的には、この地域は熱帯または亜熱帯気候の下にあり、最寒月の月平均気温がバタン島（1993-1999年平均）で18.8℃、蘭嶼（1971-2000年平均、以下同じ）で16.8℃、那覇（1971-2000年、以下同じ）で16.6℃と、おおむね熱帯性のタロイモ栽培に適した温度環境下にある。また、降水量についても、この地域は、極端な乾季は免れ、年降水量もバタン島で2000～3000mm前後（1987-1992年の平均は2662mm）、蘭嶼で3081mm、那覇で2037mmと、水文環境の面でもおおむねタロイモを始めとする根栽農耕作物群の栽培に適している（タロイモは、最低気温13～15℃以上、降水量2500mm以上で良く育ち、平均した降水をみる地域では1750mmでも可であるという…Purseglove, 1972, 63, 他）。

以上のように、この地域は太平洋の北半球側における海水大循環の西端に位置していて、北赤道海流によって運ばれた温かい海水が黒潮と呼ばれる力強い暖流となって北上し相対的に気温較差の少ない温暖な環境をもたらしていることを強調しておかねばなるまい。この海流はまた、渡海手段が未熟な時代においてはカヌーや筏による航海を手助けする力強い存在でもあった。このように人々の暮らしに深い関わりをもつ自然環境の共通性は、黒潮ルートが文化伝播という観点からも大いに注目される所以である。

2 台湾—蘭嶼ヤミ族と根栽農耕—

2.1 先史台湾と「原住」民諸族

台湾の中央山脈から海岸地域にかけて住んでいる南島系とみられる「原住」民諸族(図2)は、一般にタイヤル、(Tayal, 泰雅. アタヤル, Atayalとも)、サイシャット(Saisiat, 賽夏)・ブヌン(Bunun, 布農)・ツォウ(Tsou, 鄒)・パイワン(Paiwan, 排湾)・アミ(Ami, 阿美)・ヤミの七族に分類されるが、学術面ではパイワン族からルカイ(Rukai, 魯凱)とプユマ(Puyuma, 卑南)を分離して、九族に分類されることが多い²⁾。このうち、主として海岸地方に居住するのはアミ族とヤミ族で、他はおおむね山地に住んでおり、前者は海岸族、後者は山地族とも呼ばれる。これら台湾「原住」民諸族は南島系の人々とみられるが、彼らがいつ頃台湾へと移住して来たのかに

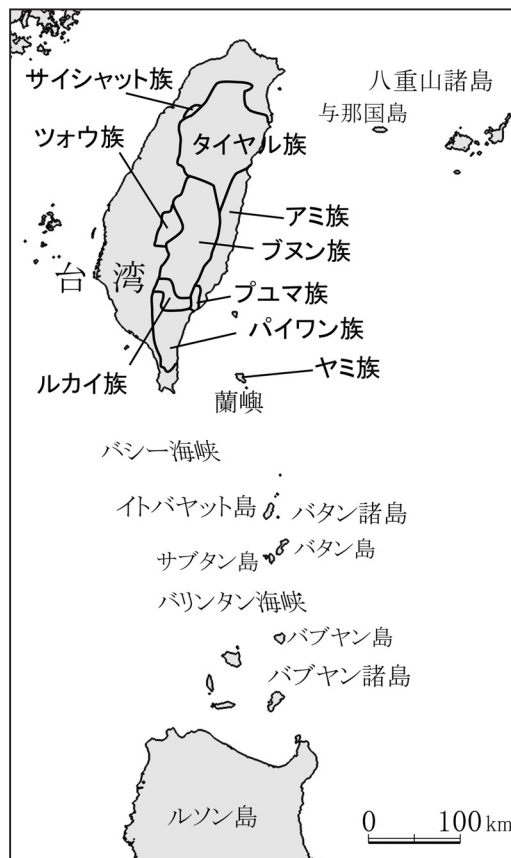


図2 台湾「原住」民諸族の分布と対象地域

については、今のところ意見の一致をみていない。なお、台湾では、日本でいう先住民を、中国語本来の意味に従って原住民と呼ぶのが一般的であるので、ここでは「原住民」と表記することにしたい。

台湾の先史文化は旧石器時代まで遡る。東部地区では八仙洞、小馬、^{おーらん}鶯鑿鼻などに大陸系とみられる最も古い文化層に属するものが残されている。そして、^{べいなん}卑南などに農耕文化を擁した新石器時代前期に属する遺跡がみられるようになる。北部の円山文化時代に相当する時期には東部縄紋紅陶文化が、やや遅れて^{ちーりん}麒麟文化や卑南文化が現れる。ただし、近年の考古学的発見から、台湾における人類の居住史はさらに古く遡ることは確かであるとされている。

陳奇祿（1992）は、台湾「原住民」の居住史として、5000年ほど前に台湾へ始めて移住して来た台湾「原住民」は台湾北部山地のタイヤルやサイシャットであり、次いでブヌン族、タウ（邵, *Thau*）族とツォウ族が中部山地に（およそ3000年前）、さらに巨石文化時代に南部山地のパイワン諸族（ルカイ族、パイワン族、プユマ族）が移住してきたという。そして、アミ族の東部への到来はやや遅れた。アミ族の文化がフィリピンの金属器文化と似ていることをとらえて、彼らの台湾への流入は紀元後であるとしている。そして、ヤミ族の来住が最も遅かったとみる。一方、国分（1992, 4-50）は、明らかに南方島嶼と連なる集団とみられるのはヤミ族だけであり、アミ族がややそれに近い要素を具えているものの、その他の「原住民」民諸族は根本的には大陸の南方、華南地方に起源するとしている。大陸方面から多くの文化要素が連続的に台湾にもたらされたことは確かであろう。ただし、国分は台湾「原住民」民文化が南方文化と関連性の深いことは否定していない。

一方で、これらの台湾「原住民」民族は、オーストロネシア系の言語を用い、多くの文化的要素において東南アジアのものと高い共通性をもつ。そのことは、彼らが南方に由来することを裏付けている。また、台湾出土の石器や土器、貝製品には隣接する琉球弧の島々、とりわけ八重山文化と関係の深いものがある。それに関連して国分（1986, 181-203）は次のような論拠を挙げている。①例えば、八重山からトカラ列島にかけてみられる地炉がアワ作を行うルカイ族においてもみられ、おそらくそれはイモ栽培に由来すると考えられる。また、台湾東海岸の無文土器は八重山の赤褐色無文土器に近いとされる。②蘭嶼で広く使用されている有稜のイモ掘棒も八重山の有稜石器に類似している。③農具との関連では、蘭嶼にみられる石製耨器が^{ほうしゃおたお}火烧島（緑島）から東海岸南部、^{ほんちゅん}恒春半島、小琉球にかけても分布する。また、④蘭嶼にみられる局部磨製石器に似たヘラ（ピラ）型の土掘り具がバタン島や八重山諸島にもみられる。

8 黒潮ルートの根栽農耕文化

さらに、⑤蘭嶼の甕棺葬はバタンのものと類似していると。

このようにみえてくると、非連続な部分が認められるものの、大きくみれば台湾、特に蘭嶼を巡って南のバタン諸島（フィリピン）から台湾本島東岸部、そして八重山諸島にかけて文化の連鎖が認められることもまた事実である。特に、ここでは来住の最も遅かったとされるヤミ族は、南方のフィリピン北部、特にバタン諸島との関係が深く、現ヤミ族はバタン諸島民と祖先を共有するとみなされていることに注目しておきたい。また、ヤミ族の来歴とその年代については、一層の考古学的な発掘と検証を積み重ねる必要がある。さらに言えば、バタン諸島と直接的な関係の深い、あるいはバタン諸島から来住したかもしれないとみられる現ヤミ族と、それ以前にも居住していたかもしれない先住民族の存在をも考慮に入れておく必要がある。

考えてみれば、大陸の南部と東南アジアの島嶼部とは原初的農耕文化の展開プロセスに深く関わってきたわけであるから、両者を全く起源を異にする異質なものとして排除する論理に陥ってはなるまい。そうした意味から、本論は、大局的な見地に立ちながら、黒潮ルートに沿う南方系文化の系列を跡付ける研究と位置づけておきたい。以下、ヤミ族の根栽農耕文化について、黒潮ルートの文化伝播という観点から隣接するフィリピンのバタネスや琉球弧の島々との関係を視野に入れながら若干の検討をおこなう。

2.2 台湾における根栽農耕文化と蘭嶼ヤミ（タオ）族

蘭嶼（図3）は、台湾島の南東部、台東市から東南東に約82kmの沖合に浮かぶ小さな島で、島の周囲は約38km、同面積は45.7km²である。北回帰線よりやや南に位置し、亜熱帯気候下にある（経度121°30'08"～121°36'12"E、緯度22°00'06"～22°05'07"N…陳玉美, 2001, 17）。バシー海峡の彼方、南に110kmほど行くと、そこはすでにフィリピン領のバタン諸島である。蘭嶼は、ルソン島弧の一部をなし、第三紀の海底火山噴火で形成された火山島で、安山岩と集塊岩からなる。この小さな島嶼は全体に山勝ちで（最高峰は紅頭山552m）、島の周囲は隆起珊瑚礁と現生珊瑚礁で囲まれている。急流をなす小河川によって開析された僅かばかりの平地や扇状地には田畑が開かれている（図4）。山地下部の緩傾斜面も棚田や畑地として利用されている。湿潤な亜熱帯の海洋性気候下にあつて、気温や降水量のいずれについても黒潮ルート上の琉球弧の島々やバタン諸島と似通っていることは既に述べたとおりであるが、より詳細に月別の変化を補っておくと次のとおりである。月別平均最低気温は12～3月は19℃を下回るものの、6～9月は23℃を越える、降水量は3月と4月が160mm台だが、そ

第3部 島社会と外界との文化邂逅

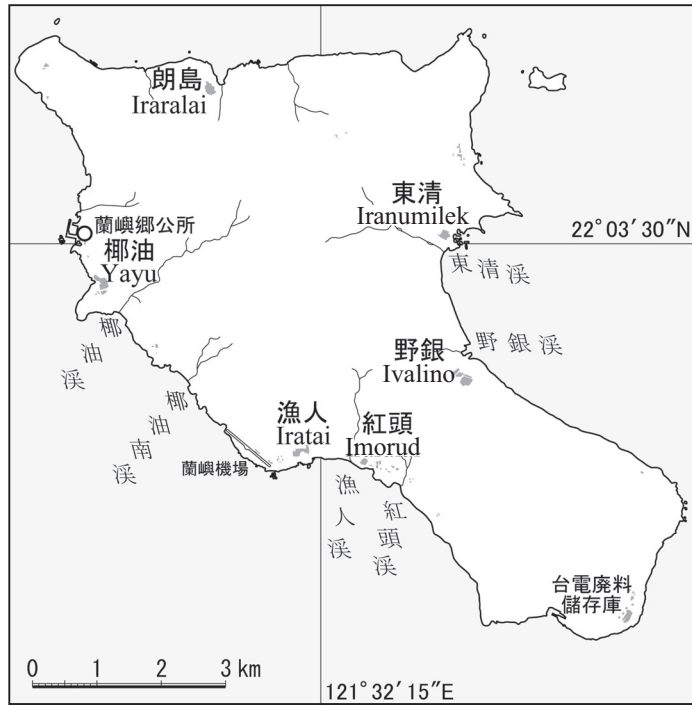


図3 蘭嶼の概念図と集落

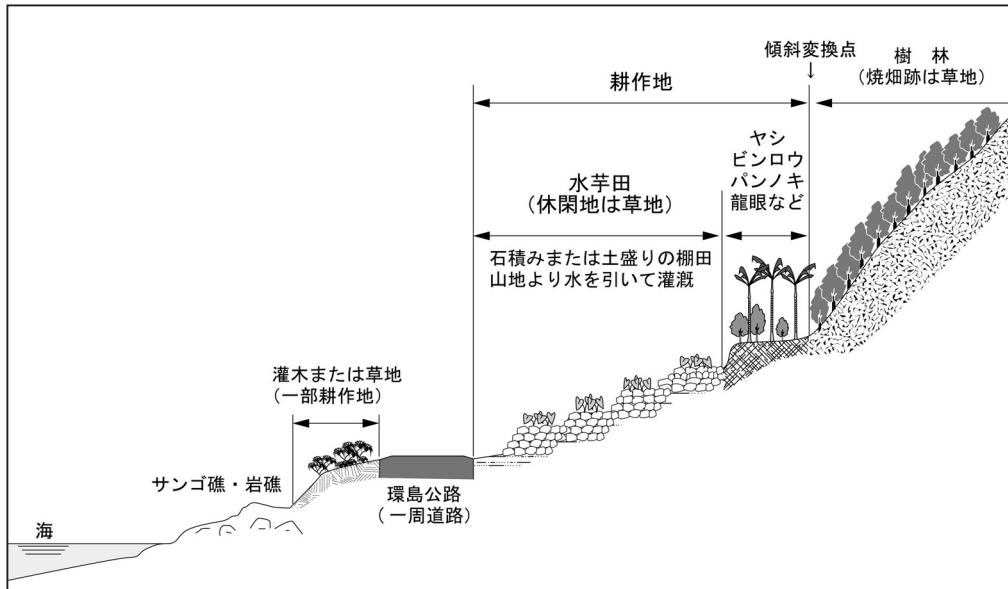


図4 蘭嶼の土地利用概念図

8 黒潮ルートの根栽農耕文化

れ以外の月は 220 mm を越えている (図 5)。

蘭嶼は郷鎮制度下の蘭嶼郷にあたり、英名は Botel Tobago で、かつては紅頭嶼とも呼ばれた。慶長 12～13 年 (1607～1608) の古地図に、蘭嶼が「タバコ」と記されている。また、明末の 1618 年の張巒：『東西洋考』には紅頭嶼としてみえ、17 世紀初頭にオランダ人が描いた絵 Pakan Ilha Formosa には Bottol と注記されている (その後 Tobacco とも記されたこともあり、やがて英文地図では Bottol Tobacco, そして現在は Botel Tobago と記載されることが多くなった)。清代には Tabaco Xima と記され、漢人の入植が進んだ。雍正 2 年 (1724) の『台海使槎録』には台湾島と蘭嶼との間で交易のあったことが記され、雍正 8 年 (1730) の『海国聞見録』には「…食諸芋海族之類、産沙金、臺灣曾有舟到其處…」とある (中央研究院民族学研究所, 1993, 1244-1245)。光緒 3 年 (1877) には、正式に恒春県に属することになった。しかし、1896 年に下関条約により台湾が日本に割譲されたのに伴って蘭嶼も日本の統治下に入り、紅頭嶼と呼ばれた。日本の敗戦により中国統治下に戻って、1947 年には特産の胡蝶蘭に因んで蘭嶼郷と命名された。なお、住民の民族名称として、鳥居龍蔵が明治 30 年 (1897) の調査で初めて Yami (雅美) という名称を用いたことから、ヤミ族という呼称が用いられてきたが、最近ではヤミ語で「人」を意味するタオ (Tao, 達悟) という呼称も用いられるようになった。しかし、いずれか一方に定まったとも言えないのが現状である。ここでは、従来から広く用いられてきたヤミ (雅美, Yami) という呼称を用いる。なお、Tao という呼称をふまえて、蘭嶼を Ponso no Tao と呼ぶこともある。

蘭嶼の人口は、1915 年 1618 人で、第二次世界大戦中および戦後しばらくは減じた

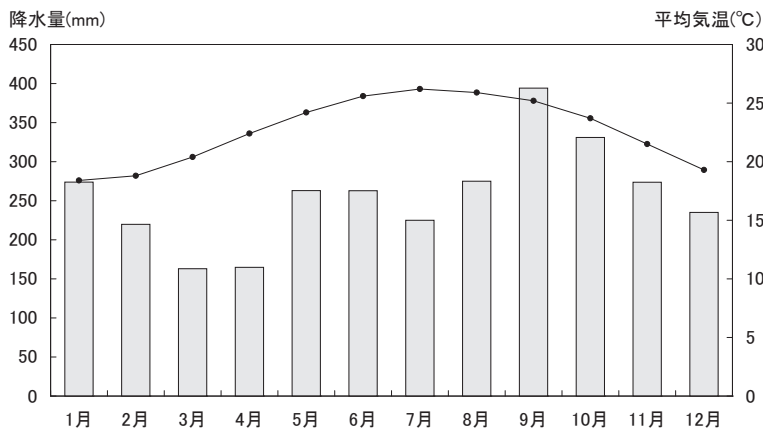


図 5 蘭嶼の月別気温・降水量

が、1960年以降は一貫して増加し、2003年現在ではかつての2.2倍に増え、戸数1018、人口3581となっている。蘭嶼郷（図4）は、紅頭村（紅頭 Imorud, 漁人 Iratai または Iratay の両集落あり, 922人）、椰油村（椰油 Yayu 集落, 793人）、朗島村（朗島 Iraralai または Iraralay 集落, 792人）、東清村（東清 Iranumilek または Iramilk, 野銀 Ivalino または Ivalinu の両集落あり, 1074人）の4村6集落³⁾からなる。なお、農牧用地面積は633haである。

2.3 主要作物の品種・栽培・利用

台湾における代表的作物としてはアワ、陸稲（モチ、ウルチ）、ヤマノイモ類、サトイモ類、トウモロコシ、サツマイモ、サトウキビなどがあげられる。「原住」民諸族の伝統的なイモの栽培状況について概観すると、サトイモ類とヤマイモが中心的な作物で、サトイモ類はタイヤル、サイシャット・ブヌン・ツォウ・パイワン・アミ・ヤミとほとんどの部族が栽培し、ヤマイモもツォウ以外の諸族が栽培してきた。

また、儀礼についてみると、ヤミ族は船の新造や家の新築時に盛大な祭りを行う。その際には、船の周り、あるいは家の屋根や軒をタロイモでもって飾る。また、儀礼についてはアワが用いられるが、これはバタン諸島（住民はイヴァタン〈Ivatan〉人）や台湾本島の諸族など、周辺のアワ文化の影響を受けたものとみられる。ただし、ヤミ族はあまりモチ性にこだわることなく、ウルチ性アワを多く栽培し、品種的にもバタン諸島のものに最も近く、台湾本島や琉球弧の島々のものにも近い。なお、台湾島の山地や琉球弧の島々ではモチ性のものが好まれる傾向にあること、ルカイ族などではタロガケの食物であるのに対して、アワはハレの食物であることを付け加えておこう。また、南部のパイワン族、ルカイ族、ヤミ族はタロイモ栽培と掘棒耕作がセットになっているのに対して、北中部のタイヤル・ブヌン・ツォウはアワ作に打製石器がセットとして利用されてきたという南北差が認められるという。

次に、ヤミ族の栽培作物のバラエティと栽培方法について、夏本（1994）、余（2004）、鄭・呂（2000）などを参考に、筆者の現地調査の結果と照合しながら述べておきたい。

ヤミ族は、基本的には適地適作で、休閒を適宜に採り入れながらそれぞれに適した輪作体系を組んでいる。水田灌漑耕作されるのはタロイモのみで、樹木作物を除いたその他の作物は基本的には畑作される。除草は適宜行われるが、基本的には肥料は施されない。これがヤミ農業の一般的な特徴といえよう。しかし、詳細にみると作物によってさまざまな特徴や差違が認められる。以下、蘭嶼の人々の食を支える主要な農作物について、その品種とバラエティ、栽培様式などについて検討を加える。

2.3.1 タロイモ（芋頭） 近代台湾におけるタロイモ生産量には増減の波があり、第二次世界大戦中は増加し、その後は減少に転じたが、1970年代後半からは再び増えてきている。そうした中で、屏東県（1978年、3305ha）が最大の産地で、高雄県（同634ha）が第2位、次いで台東県（同293ha）が第3位である。この状況は、今日においてもそう変わらないとみられる。

夏本（1994）によると、ヤミの人たちにとってタロイモは日常の食生活に深く関わっており、かつ儀礼の食用や土産用にもなるので、タロイモの栽培と管理は非常に重視され、その種類も多い。蘭嶼のタロイモには水芋と旱芋（畑サトイモ）とがある。ヤミの人たちは畑サトイモよりも水芋を好む。しかし、水田の造成はなかなか容易ではない。その場合は、畑サトイモ、サツマイモ・ヤムイモなど、斜面でも栽培できるものでもって補われる（Kano and Segawa, 1956）。水芋・旱芋のいずれも、基本的には栽培・収穫は周年おこなわれる。芋を収穫した後にカット苗（芋の頭部と茎の基部30cmほどを切り残したもの…橋本, 2002, 3, 9参照）が再び植えられる。この場合、成熟には2年を要するとしている。除草は行われる。サトイモ類は連作を嫌い、特に畑作の芋は連作すると生育不良になるので、3～4年おきに栽培するのが良いとされている（農業委員会台湾農家要覧増修訂再版策劃委員会編, 1995, 893）。その場合、水稲、その他の野菜との輪栽がおこなわれる。また、果園やブドウ棚下、蔬菜園において間作することも可能である。なおタロイモは、気温が低かったり水分が足りないと育ちが遅かったり、休眠状態におちいたりし、また霜に合うと枯死する。

水芋田の開墾は男性の仕事であるが、作付けに当たっては女性が盛装して豊饒を祈願する。除草・収穫も女性の仕事である（徐, 1999, 16）。栽培法は、前述のKano and Segawaの報告と変わるところはなく、収穫・植え付けはいつでも可である。収穫は、食の必要に応じて随時行われる。収穫法は、収穫棒を根部周りに深く差し込んで掻き回して根を切断し、芋を引き抜くというごく簡便なものである。連作中の場合は、収穫した後から直ぐさまカット苗を植える、いわゆる「茎植法」が用いられている。なお、水芋田の所有面積については、村人の間で働きの度合いに応じて、また財富や社会的地位などに応じて差がみられるという。

水芋は、主として親芋が食されるが、葉柄や葉も煮て食される（鄭・呂, 2000, 243）。また、節慶中には、贈り物として3個の芋頭と干し魚が親戚の間で交わされ、トビウオ祭りでは煮た芋頭をどろどろにし、ブタの脂を混ぜて粉餅をつくり、親友に贈られる（鄭, 1996, 101-102）。また、既述のように新屋敷落成式や新船の進水式といった重要な儀式には欠かせないものでもある。その際には、屋根や船を覆うように飾り付

けるため大量のタロイモが必要となる。そのため、前もってタロイモを大きく育てておくという。また、海の平穏を願って水芋を立て掛けることも行われる。

現在、水田で栽培されるタロイモとしては、(1)アラレン (*alaleng* …筆者は *ararun*, 橋本, 2007 参照, 以下同様)、(2)カラロ (*kalaro* …筆者は *karalun*)、(3)ミニイシヴァ (*mineysiver*)、(4)パトン (*paton* …筆者も同じ)、(5)ミラカソリ (*milakasoli* …筆者は *mirakasuri*, ただし畑サトイモに分類)、(6)オヴァン (*ovan*)、(7)オピノタラク (*opinotalak* …筆者の *opinuviyau* と同じか?)、(8)カナト (*kanato* …筆者も同じ) など8種類があげられている。それぞれの作物特性と栽培法は次の通りである。

(1) アラレン (*alaleng* … *ararun* あるいは *aralun* とも) 盛んに繁殖するので大量生産に適し、最も多く栽培されている。茎は暗紅色である。芋の質が良いので、ヤミの人たちは好んで栽培し、祝典にもよく用いる。植え付けは女性の仕事とみなされている。植える前に、まず良い苗を選んで、束にして水田に数日置いておいて、芽と根が出るのを見計らって定植される。芋を大きくするためには、一定の間隔をとって苗を植え、多く収穫したい場合は2本の苗を一緒に植えたり、間隔を狭くして植えるといった方法がとられる。苗を植えた後は水をあまり多くやらない。3カ月ほど経つと、枯れた苗や雑草を取り除き、新しい苗を植えるといった一手間をかける。1年後、根を成長させるために、水を大量にやるとともに、雑草などを全部取り除く。あとは需要に応じて適宜に収穫と補植を繰り返しながら、数年にわたって利用される。祝祭用にといった目的で大きな芋を育てたい場合は、その期間が長くなる。

(2) カラロ (*kalaro* … *karalun*) 高原の気候と土質に適し、畑作も可能である。平地の場合は、水田の周辺に植えるのがよい。新しく引かれた水路に沿う場所にも適応するし、川沿いの段々畑でもよい。いくつかの亜種がある。カラロは比較的に早熟で、一年後には食することができる。イモを掘り取ったら、その後すぐ新しい苗を植える。この方法でもって、集落の人たちは一年中水芋を食することができることになる。なお、切り取った葉柄を肥料にする集落もある。

(3) ミニイシヴァ (*mineysiver*) 湧水のある場所に適している。丈が高く、芋は紫がかった濃赤色で、大きい。一般の水田には適さない。

(4) パトン (*paton*) イモは小さいが、耐風性があり、貧しい土壌にも適応し、どこでもよく育つ。

(5) ミラカソリ (*milakasoli* … *mirakasuri*) 水田の周りなど、やや乾いた場所に植えられる。ただし、泉のある水田に植える人もある。筆者は畑サトイモに分類した。芋頭は比較的に早熟であるので、早く収穫することができる。逆に湧水のある水田に

植える場合、実が腐らないので、数年間掘り起こさなくてもよい。

(6) オヴァン (*ovan*) イモは白色で、繁殖率が低い。水路の両側に植えられる。早熟なので、家族の多い家庭はこれを補充食料とする。

(7) オピノタラク (*opinotalak*) 最も古い品種といわれ、湧水のある土地で育つので、泉の辺りや湧水のある水田に植えられることが多い。水田に長く置けば置くほど、イモは大きくなる。栽培法はミニシヴァのケースとよく似ている。

(8) カナト (*kanato*) 傾斜地に適する。筆者の聞き取りによると、比較的早く成長し、2年で収穫できるという。

衛・劉 (1962) や小西 (2003, 10) は、上記以外に *masubu*、*minisipul*、*uranururu* などをあげている。

2.3.2 畑サトイモ (早芋) など 畑サトイモ (早芋) は儀式や宴会では重宝されるが、酷暑に弱いので栽培は難しいといわれる。畑サトイモは、基本的には焼畑で、無施肥・非除草で栽培されるが、常畑でも栽培される。植え付け時期は2～4月で、虫害などの及ばないような場所を選んで、火入れして雑草などを取り除き、整地してから30～40cm間隔で苗を植える。除草は頻繁に行い、1年後に収穫期を迎える。

畑サトイモの種類としては、下記の7種類があげられている。

- ① *malalavangamineyirilaw*
- ② *mavavaengamineyirilaw*
- ③ *milakasoli*、筆者の聞き取りでは *mirakasuri* または *maragut-a-mirakasuri*。タロイモ (芋頭) の項を参照
- ④ *malalaetamilakasoli*
- ⑤ *malalaktaten*
- ⑥ *livas*
- ⑦ *aci* (小西 〈2003, 11〉 は、日本の晩生土垂タイプとしている)

この内、③と⑤が Kano / Segawa (1956) のあげたものと一致する。筆者の聞き取りでは、③、⑤、⑦が確認されている。その他に、筆者は *keitan*、*miririrao*、*mirakasuri* (以上は栽培多し)、*magagung-a-miririrao*、*maragut-mirakasuri*、*masuvu* といった種類も得ている (*mirakasuri* と *masuvu* は水芋としてもあげられており、水芋と早芋の区分には曖昧なところがある)。衛・劉 (1962) は *manpala*、*ringring* などをあげている。畑サトイモの食し方は、水芋とそう大きく異なるところはなく、子芋・親芋を壺で水煮にして、茹だった芋の皮を剥いて食するのが一般的である (鄭, 1996, 72)。

その他のアロカシア (*Alocasia*) 系統のイモとしては、蘭嶼芋 (*gagusud*, 学名 *Colocasia kotoensis* Hayata, 豚の餌用)、姑婆芋 (クワズイモ, 学名 *roan*, *Alocasia macrorrhiza* Schott & Endi) がある。

2.3.3 ヤマノイモ類 (山薬, 山薬, 山芋) ヤムイモは日当たりの良い山地に植ええられる。開墾時は焼かないのが原則である (焼畑方式で開墾されるのはサツマイモ・アワ・畑サトイモ栽培用の畑のみである…徐, 1986, 79)。また、産婦はこのイモを食べてはいけないとされる。ヤムイモは日当たり良好な山地を好み、焼畑開墾は不可とされ、畑は耕されず、一般には1月に植え、9月～翌年4月に収穫される。蘭嶼では2月15日 (月圓の日) に播種し、11月中旬頃に収穫される (徐, 1999, 19)。なお、タロイモやサツマイモは女性が栽培するものとされるのに対して、ヤムイモ栽培は男性が携わるものとされている。

ヤマノイモ類として14種があげられ、そのうち7種は原産種で、2種がフィリピン諸島から、そして5種が日本の統治時代に導入されたものであるとされている。そのうち、Kano/Segawa (1956) のあげたものと一致しているのは、*mineymamayo* (Kano/Segawa によると *Minimamayu*, 以下同様)、*mineymagalas* (*minimagaras*)、*romako* (*rumaku*)、*rogorog* (*rogrog*) の4種だけである。その他のものをいくつかあげると、*patan*、*pigilan*、*kozsakis*、*marengai*、*mapohossoho*、*ovinokayngng*、*uvi-no-tokon*、*karusakes*、*makumaipagabagaritan*、*kumaku* などである。このうち、*minimamayu*、*mineymagals*、が主たる栽培種であるといわれる。なお、ヤムイモのバラエティとして *uvi-no-ruru* を付け加えておこう。また、*patan* は刺薯蕷 (*D. esculenta* Burkill, トゲドコロ) のことで、主食作物の一つで美味とされ、生食も可である。このトゲドコロは、ヤムイモが斜面に植えられるのに対して、主として斜面下部の平坦面に植えられる (徐, 1999, 19)。その他に、日本の統治時代に導入された“山芋” (ヤミ語で *Vežannodede*, 長イモのことか) が冬の日常食として、また儀式や宴会などで客をもてなす食材として用いられている。

その他の薯蕷科 (*Dioscoreaceae*) 作物としては、蘭嶼田薯 (イバ 〈*iba*〉, 学名 *D. cumingii* Prain & Burk. …塊茎を食し、茎は縄材として用いられ、ブタの餌ともなる) などがある。

山薬の栽培時期は冬の終わりから初春にかけてで、2～3月頃がよいとされる。土の柔らかな場所を選んで、きれいに整地して穴を掘り、苗を植え、ツタが這い上がるように支柱を添える。植え終わると儀式を行い、魔よけのために木の棒に蔦の輪をつけたり、ネズミなどに食べられないように姑婆芋 (ロアン 〈*roan*〉) のスライスした

ものを畑に撒いたりする。なお、除草は頻繁に行われる。収穫は11月頃になる。

2.3.4 サツマイモ（甘藷または地瓜） 今日では、サツマイモはヤミの人びとにとって日常生活に欠かせない重要な食料の一つとなっている。事実、サツマイモは蘭嶼の風土の下でよく育ち、この地域の食生活を豊かにしてきた。ただし、先に述べたように蘭嶼への導入時期はかなり遅かった。

サツマイモは、新たに耕された畑に10～11月頃に植え、春に収穫するか、または5月末にアワ収穫後の畑に植え、冬に収穫される（冬場の貴重な食料源である）。イモ畑の造成に当たっては、まず山や平地の雑草を焼き払い、土をほぐして軟らかくしてから均す。栽培法は、昔は掘棒で土を掻き起こしてから、雨の日を選んで苗が植えられたが、今日では鋤、鉄棒、鎌などの道具を使って耕起・植栽されている。イモ苗となる蔓は、白系と赤系を問わず、柄となる節の多いものほど良いとされ、できるだけそうしたものを選んで植え付けられる。そうすると、すぐに芽が出るという。苗を植えてから1カ月後に耨耕し、さらに1カ月経ってから2回目の草取りというように数回にわたって除草が行われる。

サツマイモのバラエティとしては20種ほどあり、イモの中身の色で分けると赤系と白系とに大きく分類される。赤系としては *idenden*、*angkoimo* など、白系としては *movongsovonong*、*kalango*、*wakaynoimanira* などがあり、たくさんのバラエティが導入され栽培されている。特に赤い表皮の *wakai-no-ibatan* はバタン島からはるか昔に導入されたという。畑サトイモと混植される。

2.3.5 アワ（小米） 唯一の穀物であるアワ（小米 *karai*）は、あまり多くは栽培されないが、*Tau-du-to* が宿る神聖な作物とみなされ、節慶の折りに使う神聖な食べ物であり、新築落成祝い等の祭事に用いられたり、産婦や老人用の食として小米飯、小米粥などの食材としても重宝されている。

アワ栽培は、11月頃にサツマイモを全部掘り取った後、整地し、12月（地域によっては、気候条件などの違いから2月頃になることもある）に入ると男子が銀冑を被って豊饒祈願し、その後の吉日を選んで女性たちがアワの種を手撒きするという。種撒きが終わると、草取りなどの仕事をしないで直ちに家に戻らなければならない。それは、不吉を招かないようにという配慮からである。栽培期間中は、適宜除草が行われるが、大きくなるとその必要はなくなる。翌年の5～6月頃に、小刀を使った穂刈り方式で収穫される。なお、特定の品種を長老の指導の下に共同開墾地で集団的に栽培されるケースがある。この場合、草取りは必ず共同で行うというように、作業や振る舞いなどにかかなり強い集団的規制が及ぶ。

小米の後作としては早芋を植えた場合は、翌年4月に収穫され、収穫と同時に苗が再植される。またサツマイモを植えた場合は、6カ月後に収穫される。

アワの種類としては、① *volok*、② *zicyayo*、③ *langa*、④ *aray*、⑤ *mibobo*、⑥ *mineymamayoakadai*、⑦ *kadainodede* の7種類があげられ、前の3種類が蘭嶼原産であるとしている。このうち、①、③、④が Kano / Segawa (1956) のあげたものと一致する。筆者の聞き取りでは、*arai*、*richai*、*raga*、*borok* など、12種ほどある。

2.4 農具

農具としては、硬木を使って製された掘棒 (*kakali*) が使われる。用途に応じてさまざまなタイプのものが使われる (徐, 1986, 72-89 に詳しい)。縁には、細かくエッジが付けられている。しかし、現在では鉄製の掘棒 (ヴァラン *varan* で約 60 cm, 短いものはリクラヴァラン *rikura-varan* で約 40 cm) が用いられている。家屋新築・大船進水式・豊饒祈願祭などの儀礼用にはヴァヴァゴアカヨ (*vava-got-a-kayo*) と呼ばれる頭部に湾曲した飾りの付いた儀礼用掘棒が用いられ、今もこの用途には特別な木で製された掘棒が用いられる。その他に、バール状の掘り具 (ラクワヴァラン *rakuwa-baran* で約 140cm, 短いモノはトモトンナラクワヴァラン *tomoton-na-rakuwa-varan*)、カカルー (*kakaruh*) と呼ばれる鍬、収穫用ナイフのイパガン (*ipagan*)、除草あるいは清掃用に用いられる鎌のパラン (*paran*)、カロイロタナ (*karoiro-tana*) と呼ばれる除草具などがある。ともあれ、木製農具が鉄製のものにとって代わられてきているが、基本的には掘棒文化が維持されている点に注目をすべきであろう。

2.5 いくつかの農作物の由来

先の論文 (橋本, 2007, 55-77) では、蘭嶼ヤミ族の根栽農耕、特にタロイモ栽培にみられる土地利用、栽培種、栽培方法、農具などについて報告した。しかし、タロイモ以外の作物について言及するところが少なかつたし、その民俗的な側面についてはあまり触れることができなかった。そこで、ヤムイモ (*Dioscorea alata* L., 大薯)、サツマイモ (*Ipomoea batatas*, 甘藷または地瓜)、アワ (*Setaria italica* (L.) Beauv., 粟または小米) の品種とその特性・栽培法などとともに、サトイモ類も含めた作物起源伝承から読み取れる事柄についても論及したい。

2.5.1 サツマイモ (*Ipomoea batatas*, (L.) Lam., 甘藷または地瓜) サツマイモは、サトイモ類、ヤムイモ、カッサバ (*Manihot esculenta* Cranz, 樹薯または木薯) などとともに台湾における主要な塊茎作物の一つに数えられ、北部山地ではサトイモ類

に取って代わって主食物となっている。

新大陸の熱帯地域を原産地とするサツマイモは大航海時代にヨーロッパ人の手によって世界各地に拡散されたが、アジア東部では16世紀にスペイン人によってフィリピン(ルソン)にもたらされ、そこから各地に広がったとみられる。中国には1570年頃にルソンから福建省の閩にもたらされ、それが1594年の大飢饉の際に救荒食として栽培することが奨励され、広まったと伝えられている⁴⁾。

では、サツマイモが台湾へ導入されたのはいつ頃のことなのか。16世紀末、中国の東南沿海地方と台湾の間で植民が盛んに行われた。その際に、台湾へ移住した中国人(福建省などから)が育てやすい農作物をもってきたと考えるのはごく自然なことであろう。実は、1602年にはサツマイモのことに言及した記事が台湾でも認められるのである。また、17世紀半ばのオランダ(荷蘭)人の記載によると、すでにその頃にはサツマイモが台湾南部で普及しており、18世紀に入ると台湾の重要な主食となっていた。なお、台湾山地に入った時期については明確に断定することができないが、18世紀には鳳山県の「原住」民がすでにサツマイモを栽培していたという。したがって、19世紀半ば頃にはサツマイモ栽培は台湾山地全域で行われるようになっていたとみてよからう。なお、日本には1605年に中国への進貢船の事務長であった野国総管が福建省から芋づるを持ち帰り、広まったと伝えられる。また、それより早い1597年に長真氏旨屋が宮古島に芋づるを持ち帰ったとも伝えられている(坂井, 1999, 33-36)。

東南アジアでは稲を主食として、サツマイモを副食とする地域が多いが、いくつかの地域では、サツマイモの摂取量が稲を超えている。フィリピンの1948年と1981年の作物栽培面積資料によれば、全根茎類の栽培面積16万km²(1948年)→47.7万km²(1981年)のうち、カッサバ3.3万→21.1万ha、タロイモ1.0万→3.2万haに対して、サツマイモは11.5万→22.1万haであった(Philippine Council for Agriculture and Resources Research and Development, 1984)。台湾でも、北部の諸族はアワを貴重な食物とするが、サツマイモの消費量の方がアワよりもはるかに多い。

2.5.2 粟 (*Setaria italica* (L.) Beauv., 小米) アワの原種は旧世界に広く分布するエノコログサ (*Sativa viridis* Beauv.) とされるが、その栽培地域は中国を中心とする東アジアとみられ、黄河流域の中原ではすでに2700 BC頃には栽培されていたという。日本や台湾へも稲作以前の栽培作物として、かなり早い時期に伝わって普及し、畑作文化の中核的作物の一つとして重要な役割を果たしてきた。

先にも触れたように、台湾の「原住」民文化は東南アジア文化圏では比較的古い層に属し、すでに紀元前2000～1000年頃には台湾と大陸の間で民族・文化の接触が頻

繁に行われていた。台湾の数多くの遺跡はこの時代のものである。台湾西岸地域における三つの重要な先史文化、北部の円山文化、中部の黒陶文化、南部の龍山文化はいずれも紀元前2000～1000年頃に始まって、紀元1～5世紀まで続いた。紀元前2000～1000年は中国の夏商（殷）周三代に当たる。この三代の農業は山や傾斜地で行われるいわゆる「山耕」（畑作）で、主な農作物はヒエ（稷）、キビ（黍）、リョウ（梁 *Setaria italica* Beaub. var. *maxima* Al., オオアワ）、アワ（粟, *Setaria italica* Beaub. var. *germanicum* Trin., コアワともいう⁵⁾）であった。三代の時代に中国の民族は絶えず周辺地域へと移住しており、当然台湾への移住も盛んに行われ、その際にアワがこの地に将来されてとみてよからう。

一方、紀元前3000年頃の東南アジアには旧石器を用いた狩猟・採集者と、新石器を用いる原始農耕者、つまり塊茎類栽培者がいた。そして、これら南島系民族（Austro-nesian）は紀元前2000年代の中頃に台湾へ渡来した際にアワ、キビ、陸稲などの耕作をもたらしたともいうが、確証はない。

2.5.3 稲（*Oryza sativa* L.） 台湾での稲栽培法には2種類、旱稲耕作と水稲耕作とがある。旱稲耕作は山耕で、草木を焼き払って灰にし、それを肥料として耕作する、いわゆる焼畑である。水稲耕作にはいくつかの方法がある。最も原始的な方法は自然の湿地で耕作するやり方である。毎年氾濫する川床で耕作するケースもある。雨季に農民が雨水を低地へ引いて耕作するところもある。比較的進歩した方法は、用水路を作って、川や井戸から水を引いて田に導水するものである。傾斜地の場合は、用水を節約するために棚田が造成される。

さて、台湾での稲作はいつ頃から始まったのか。「原住」民の初期稲作は陸稲の畑作であったとみられている。現代の陸稲栽培法は粟作の方法とほぼ同じで、種まきは立ったまま行われる、苗床は作られない。収穫は手や機械による。収穫した稲は穂がついたまま保存され、食用にする際に脱穀される。早期の台湾文献によると、すでに漢民族に同化した西部平地の「原住」民諸族でも、かつてはこれと同じ方法で陸稲作を行っていたという。それが正しければ、台湾の「原住」民は、進歩した水稲耕作が導入される以前に、陸稲栽培技術をすでに獲得していたということになる。それに対して、水稲作の台湾への導入時期については営埔で出土した米粒の痕跡の分析から、龍山形成期文化或いは円山文化の主人公たちによってもたらされたという考え方もある。しかし、その年代に水稲耕作がすでにアジア東部で相当に普及したという確たる証拠は今のところない。この問題は、東南アジアにおける陸稲栽培、水稲栽培、およびタロイモ水田栽培の発達とその地域的展開過程とも絡む基本的な事柄であるだけに、よ

り慎重な検討を要する。

2.6 農作物およびバタン（巴丹）人との交流に関する伝説から

ヤミの主たる農作物は、芋頭（タロイモ）、山薬（ヤムイモ）、地瓜（サツマイモ）、旱芋（里芋）などのイモ類と小米（アワ）である。ヤミの人たちは、その大部分は外部から導入されたものであって、芋頭と粟だけが島で生まれ育った生え抜きの作物であると認識している。

そこで、いくつかの代表的作物の由来に関するヤミの人たちの伝承を夏本（1994, 60-67）によりながら紹介し、そこから読み取れる事柄について検討しておきたい。

2.6.1 芋頭に関する伝説 昔、一本の大樹の腐った洞に芋頭があった。ある時、祖父がみんなに食べ物を探しに行かせた。二人の孫が、その洞穴から太い根っこを採ってきた。祖父はそれを見て、「これは芋頭だ。苗を水の中に差し込んで育てるように」と指示する。二人の孫は芋頭の苗を水のあるところに植え、二、三年後にはたくさんの芋頭を収穫することができた。それを知ったヤミの人たちは、あちらこちらに集落を築き、たくさんの土地を開墾し、芋頭を栽培した。かくして、芋頭はヤミ族の最も主要な食物となった。

2.6.2 地瓜（サツマイモ）に関する伝説 地瓜は大昔に海を渡ってきたもので、二人の姉妹が見つけたという。大昔、Jimaliodod（紅頭か）集落に4人家族が住んでいた。ある日、両親に留守番をしていると言われて姉妹がひもじくなって、食べ物を探しに出かけることになった。彼女たちは海辺で二つの赤っぽいモノを見つけ、皮を剥いて嚙ってみると甘いことがわかり、姉は全部食べてしまった。しかし、妹は両親に見せるために食べずに持ち帰り、両親にことの経緯を話し、赤い食べ物を両親に渡した。両親はそれを庭のパナナザバン（pananazaban, 豚や羊を焙る場所）に植えた。一週間後に芽が出、半年後には、庭全体を覆うほどに茂ってきた。3個掘りあげて食したところ、普段と違って満腹感が得られた。その後、たくさんの赤いイモを栽培し、この一家の生活が改善された。長い年月の間に全島で栽培されるようになり、この赤いサツマイモはヤミ族の主要な食物となった。

2.6.3 旱芋（里芋）に関する伝説 ヤミ族の各集落が成立した後も、さまざまな地方から色々な食物が島へもたらされた。旱芋もその中の一つである。旱芋は種類が多く、ミラカソリ（milakasoli）、ミニイティラウ（mineytilaw）、リヴァス（livas）、アキ（aci）、マララクタテン（malalaktagen）の5種類があり、それぞれの導入時期は異なるが、この地で長きにわたって育まれてきた。

2.6.4 “山芋”（サンシャオ）の由来 “山芋”（*vezannodede*）は、日本の統治時代に蘭嶼へ導入され、ヤミの人々によって栽培されるようになり、冬の主な食料となった。それに関して次のような言い伝えがある。日本の統治時代に台東に行った数人の男の内の一人在病気になったが、山芋を煮て食べさせたところ、快方に向かった。彼らは台東人から山芋の苗をもらい、自分の畑に植え、育てた。数年後、山芋は六つの集落で栽培されるようになり、ヤミの人たちの主要な食料となった。

2.6.5 小米（アワ）に関する伝説 洪水が島から退いてから数十年後、アワは兄弟によって発見されたという。大昔、ジタプトク（Jitaptok）の人たちは、平原に移った時、祖父は二人の孫に食べ物を探しに行かせた。兄弟は島のあちらこちらを歩き回り、ついに小さな平原で黒くて硬い実が付けた草を見つけた。それがアワであった。祖父の指示に従ってアワの実を蒔いたところ、数カ月後に収穫することができた。その後、その食べ物はヤミ族の最も良い食料となった。なお、台湾の「原住」民にとってアワは神聖な作物であり、その栽培から収穫に至るまでの間には多くの禁忌が設けられ、また多くの農耕儀礼と深く関わっている。

2.6.6 バタン人との商売 ヤミ族の間では、彼らの祖先がフィリピンのバタン（巴丹）島から移住してきたこと、そして昔は二つの島の間で頻繁な交流があったことが語り継がれている。昔、漁人集落には Si-Mangangavang という巨人がいた。彼は漁人集落の東側の Sira do Kaozi 家族の祖先である。ある時、彼は息子と力を合わせて 16 人乗りの舟を作って、フィリピンのバタン島へ商売に赴いた。その島の Si-Vakag という巨人と友達になり、バタン特産の牛（黄牛や水牛）の皮を持ち帰った。

2.6.7 漁をもって友情を結ぶ 漁人集落に Si-Ciaong という巨人がいた。彼は海でバタンからきたイヴァタン人と友達になり、トビウオ漁の方法を教わり、釣り針も貰った。二人は昼食時に食べ物を交換した。Si-Ciaong から大きな芋頭を、そしてイヴァタン人からは山薬（*ovi*）である。Si-Ciaong がヤムイモをとっても好きなのを知ったイヴァタン人は、次に会った時に山薬の種を持ってきて、その栽培法を教えた。その後、山薬が蘭嶼で非常によく育ち、普及するようになった。それ以来、ヤミの人たちは山薬を *ovi no dehdah*（巴丹山薬）と呼ぶようになった。

2.6.8 巴丹島との交流を中止 バタン島との交流は約 300 年前に中止された。その原因は積年の恨みや女性問題から流血事件が生じ、たくさんの死者を出したからである。しかし、しばしば強い海流に乗って、あるいは風に流されてイヴァタン人の舟が蘭嶼へ漂着することがあった。60～70 年前に、イヴァタン人の舟が風で朗島へ漂流した。Simminaman-Jialid はこの舟の船員を助けた。船長は感謝の気持ちから彼に

一本の刀を贈ったという。彼の後代は今もそのバタンからの刀を使っているという。

2.6.9 伝説から ヤミの人たちにとって重要な作物の由来に関する伝説にはいくつかの共通点が認められ、そこからヤミ文化の特徴、あるいは他の文化との共通性や類似性がすけて見える。まず、共通点として次のような事項を指摘することができる。①登場人物は祖父と孫（兄弟）、父母と子供（姉妹）、そして巨人である。前の二つのケースは島内での話して、“モノ”（何かわからないもの）の発見者は孫や子供である。これは、子供という無心な心をもった者だからこそ発見できたんだということを主張しているようにみえる。それに対して、その“モノ”を食べ物であることを見破り、栽培させるのは祖父であり、父母である。家族という枠組みの中で“無垢”なる者と“知”あるエルダーとの協力によって“モノ”が主食へと転換し、そのことを村人が学習することによって、主食作物が普及するというのが話しの筋立てとなっている。このようなストーリーの組み立ては割に普遍的であるといえよう。それに対して、バタンとの交流ストーリーにみられる巨人伝説は、巨人に対する肯定的な想いがにじみ出ており、神話的な世界を演出しているようにみえる。そこには、巨人を異形なもの、対立的他者に対する畏怖・恐怖と排斥といった否定的な感情は認められない。むしろ親和的であるといえよう。とはいえ、両地域間の交流が途絶えていた説明として恨みや流血事件が挙げられているのも見過ごせない。しかし、それも救助⇔感謝という今一つの文脈との関連において位置づけられるべきであろう。

3 バタネスの農耕

黒潮ルートの最も南寄りに位置すフィリピン諸島においては、既に述べたように早い段階で稲作が普及した。そのため、根栽農耕は後退し、今や伝統的なイモ栽培は一部の地域で細々と続けられているに過ぎない。中には、レリクト作物的に遺存するケースも認められる。ただし、ミンダナオ島、ルソン島とその北のバタン諸島などに注目すると、今なお根栽農耕の面影を辿ることができる。先に述べたように、1930年代末頃には、サツマイモの栽培面積7.5万haに対してタロイモは同1.3万haであったというから（大林, 1961, 215）、かつてはタロイモも食糧供給の上でかなり重要な役割を果たしていたとみてよかろう。ましてや、サツマイモやカッサバは大航海時代にスペイン人によってもたらされた栽培史の比較的浅い作物であることを考えるならば、それらが今日占めている地位をかつてはタロイモやヤムイモなどが占めていたと考えてよかろう。その点を踏まえて、大林（1961, 265-269）は、フィリピンには焼畑耕

作される里芋と灌漑耕作される水芋とがあり、里芋は焼畑耕作民の間でかなり広範に行われてきたのに対して、水芋栽培は主としてルソン島北部の雛壇耕作地域で行われていて、雛壇水稲作以前から行われてきた農耕であることはかなりの蓋然性をもっていえるとしている。

ルソン島と台湾の間に横たわる島嶼域、バブヤン諸島とバタン諸島については、現在では畑作の里芋が残るのみであるが、水路沿いに野生化したとみられるサトイモ類が遺存しており、また後述するようにイモ呼称においてヤミ族のものと共通する面が認められることなどからして、タロイモ栽培の系譜検討に当たってはこの地域も考慮に入れるべきであろう。

3.1 バタネスの概要

図2に示したように、ルソン島から北に約160 km程離れたバタネス (Batanes) 州はフィリピンの最北端に位置して10の島々からなり、州域 (209 km²)、人口 (16,467人…2000年) のいずれをとっても最も小さな州の一つである。州都はバスコ (Basco) で、イトバヤット (Itbayat)、バタン (Batan)、およびサブタン (Sabatang) の3島が主島をなす。南にはバリントタン (Balingtang) 海峡を介してバブヤン (Babuyan) 諸島が控える。

バタネスの人びとはイヴァタン人と呼ばれ、バシー (Bashi) 海峡の北側、台湾の最南東端に位置する蘭嶼のヤミ族とは人種的・文化的に同種であるといわれる (後述)。言語的には、バタン島とサブタン島ではイヴァタン語が、イトバヤットではイチバヤタン (*Ichbayatan*) 語が話されている。

地形はおおむね山勝ちで、少しばかりの平地と緩傾斜の丘陵地が農業用地、あるいは牧畜地として利用されている。気候は蘭嶼に類似し、気温 (1993～1999年) は、月平均気温が23℃～29℃と振幅は小さくて、最寒月の月平均気温は先述のように18.8℃と高い。降水量 (1987～1999年の平均) は、年平均で2662 mm、月別では2～4月が乾季で月平均降水量は100 mmを切るが、その他の月は7月の161 mmを除けば、他はすべて200 mm以上である。ただし、年によっては偏差が大きい。

イヴァタン人の労働人口の75%は農耕または漁撈に従事している。農業の収入面ではガーリック (アクス <*akus*> またはアコス <*acos*>) と牧牛、酪農が主で、主食用としてヤムイモ (ウヴィ <*uvi*>)、サツマイモ (ワカイ <*wakay*>)、サトイモ (スディ <*sudi*>)、ハリイモまたはトゲドコロ (ドゥカイ <*dukay*>, *Dioscorea esculenta*)、カッサバ (カモテン=カホイ <*kamoteng kahoy*>) などの塊茎作物、野菜類、そしてサト

ウキビ（ウナス〈*unas*））が栽培され、パレク（*palek*）と呼ばれる地酒を醸造し、飲む習いがある。家畜としては、牛以外にブタやニワトリが飼育されている。その他に、陸稲も栽培されている。

イヴァタンで最も重要な作物はウヴィ（7品種あり）で、最も豊かな土壌からなる土地に植えられる。ウヴィの新植に当たっては親類・友人を招いて行われ、収穫祭にはウヴィと塩干しのシイラでもって祝われる。イヴァタン人にとってウヴィは豊饒、長寿、成功のシンボルであり、その他にもさまざまな儀礼、禁忌を伴う。それに対して、サトイモ類やサツマイモに関わる儀礼は乏しい。

さて、サトイモ類の栽培が認められることは述べたが、それは畑作のもので、灌漑耕作は認められない。この点について、寛文年間の尾州の漂流船からの聞き取り文書も、バタン諸島の島の農耕について「山焼きにて植物は芋斗り作申候」と、焼畑でサトイモ、サツマイモ、ハリイモ、サトウキビなどを主に栽培していた様子を伝えている。しかし、言語・文化的類似性の高い台湾南部の蘭嶼のヤミ（タオ）族が盛んにタロイモの水田耕作を営んでいることに鑑みると、バタネスの人々もかつてはタロイモの水田耕作またはそれに類似する農耕を行っていた可能性が高いとみられる。ともあれ、黒潮に沿う根栽農耕文化の伝播という観点からは、フィリピン諸島における伝統的根栽農耕の状況とその系譜的な関係の整理が欠かせない。本報告ではその一端として、バタン諸島における現地調査の結果を踏まえて報告をしておきたい。

3.2 イトバヤット（*Itbayat*）における根栽農耕

（インフォーマント：ダリウス＝マルパ〈*Darius Malupa*）氏）

以下は、2007年3月25～28日に実施したバタネス州調査において、イトバヤット在のダリウス＝マルパ氏からの聞き取り、情報提供に基づいたイトバヤットにおける根栽作物栽培様式の報告である。

3.2.1 全体 まず、イトバヤットにおける農業の基本的な仕組みについて概括的な説明をしておきたい。箇条書きすれば、次のとおりである。

- ① 金肥は使わず、雑草や収穫後の作物の葉・葉柄を乾かして肥料とする。3年ほどにわたって輪作を行う。
- ② 3年ほど土地利用した後、5～7年間休閑する。その際、林化を促進するために樹木の苗を植える。
- ③ 長期にわたる休閑により林に戻った土地を再墾し、耕地に整える。これを *michamcam* と呼ぶ。

3.2.2 いくつかの作物の栽培法 次にヤムイモ、トゲイモ、サトイモ、サツマイモの栽培法についての聞き取り結果をまとめておく。

- (1) ウヴィ (*uvi*, T: *ubi* … Tはタガログ語, 以下同様) とルカイ (*lukay*, T: *tugi*, イバタン語ではドゥカイ <*dukay*>)
- ① 新たに開墾した土地には、まず10～11月頃に耕地に穴に掘ってウヴィとルカイ(この塊茎には棘状の毛がある)のイモ苗を貯蔵しておく。そして、1～2月頃に新芽が出てくると、トウモロコシ畑にウヴィとルカイを間植する。この新植に当たっては、親戚、友人、隣近所の人たちが手伝う。
 - ② ウヴィとルカイは分植または混作される。なお、混作の場合は、ウヴィ3～4に対して、ルカイ1の割合で植える。
 - ③ この種の作物は大抵は一年の最初の3カ月(1～3月の意味)に植えられる。ウヴィとルカイも、その頃にトウモロコシ畑に間植される。
 - ④ トウモロコシを収穫するにあつては、トウモロコシの茎を折り曲げておく。これは、ウヴィがこの折り曲げた茎に絡み付いて伸び、地面を這わないで済むようにするためである。これによって、暑い季節にウヴィの茎が地熱で灼かれるのを防ぐことができる。
 - ⑤ 除草は必要に応じて行うが、ハヴァヤト (*havayat*, 西風) の時期を除く。気候条件にもよるが、6～8カ月で収穫可能となる。
 - ⑥ 収穫の際に、植栽用ものは食用のものと区分して、台所などの家の中に設けられたアリサン (*alisan*) と呼ぶ貯蔵用のスペースに取り除けておく。10カ月は貯蔵可能である。ただし、この間に芽が出てくると、いちいち取り除いてやる必要がある。
- (2) スリ (*suli*, T: *gabi*, サトイモ, バタン語は *sudi*)
- スリ栽培は、ウヴィ (*naxhivatan* 種のみ) との間作 (*intercrop*) による。ナイプラ=スリ (*naypura suli*) は、日陰のある場所でよく育つので、サトイモ畑の周りに植えられる。
- (3) ワカイ (*wakay*, T: *camote*, サツマイモ)
- ① ウヴィとルカイの後作として植える。ワカイは第1四半期または第3四半期に植えるのが最も良いとされる。
 - ② 植え付けてから2カ月目に除草と軽い中耕を行う。この作業をプネン (*punen*) と呼ぶ。
 - ③ サツマイモ収穫後は、除草を控えて、ひこばえを待つ。

8 黒潮ルートの根栽農耕文化

3.2.3 農具と輪作体系の事例 次に、イトバヤットでの主たる農具の一覧（表1）と典型的な輪作体系（表2）の1例を示しておく。

表1 農具（イトバヤット）

英語	日本語	イトバヤット語	説明
bolo	鉞	<i>ngarex</i>	蔓や樹を切るのに使用
axe	斧	<i>kutaw</i>	大きな樹を伐るのに使用
crowbar	バール	<i>iswan</i>	収穫や植え付けの際に使用
handbar	掘棒	<i>bareta</i>	穴を掘るの使用
weeder	草刈り具	<i>ikukurih?</i>	除草具（L字型のフック、 <i>kadang</i> のことか）

表2 輪作体系（イトバヤット）

作物名：	ガーリック	→	米	→	トウモロコシ	→	ウヴィとルカイ	→	ワカイ
栽培期間：	4カ月		4カ月		4カ月		8カ月		1年
	（計32カ月）								

3.3 まとめ

バタネスの代表的な地域としてイトバヤットの事例を取り上げ、バタン諸島における農業様式を俯瞰したところから次のようにいえる。まず、基本的にはかなり成熟した焼畑農耕が営まれているということである。自然条件からして、灌漑耕作は基本的には行われず、天水農業が行われている。主たる農作物はヤムイモ、サツマイモ、里芋などのイモ類である。まさに、前掲の寛文年間の尾州の漂流船からの聞き取り文書にあるとおりの農法が今も行われているといえよう。また、その農法は根栽農耕の基本を踏まえたものである。その点からすれば、バタン諸島では伝統的な根栽農耕が今も営まれているということになる。ただし、タロイモ灌漑耕作については、かつては行われていたかもしれないという推測の域を出ない。

ともあれ、ルソン島北部の人々と台湾蘭嶼のヤミ族という根栽農耕民の間であって同じく根栽農耕を営むバタン諸島民は、黒潮ルートに沿う根栽農耕文化圏の連続の鎖に連なっていると位置づけることができよう。

4 琉球弧の島々における根栽農耕——連続と非連続——

日本の南西端にあって、北東から南西へと細長く連なる琉球弧は、南や北、あるいは西方から流入して来る文化を取り入れながら独自の文化を育んできた。別けても、その西端が台湾島に接し、中国大陸やフィリピン諸島などの南の島々へと連なるこの弧状列島は南方文化との関わりが深い。そこで、黒潮ルートに沿う根栽農耕文化の連続と非連続という観点から、改めて琉球弧の島々の位置づけをおこなっておきたい。

琉球弧の島々（図6）は、大きくは琉球諸島と薩南諸島からなり、琉球諸島は先島諸島・沖縄諸島に、薩南諸島は奄美諸島・トカラ列島・大隅諸島に細分される。地形的には、石灰岩台地からなる低い島々と複雑に褶曲した山地の多い高い島々からなる。気候的には南島型とも呼べるタイプを示す。年降水量（1971-2000年平均、以下同じ）は那覇で2037mm、名瀬で2914mmと相対的に多く、季節的には夏季が多雨となっている。しかし、これは台風によってもたらされた降雨によるもので、普段はむしろ降水の少ない季節にあたる。地域的には南の島ほど、そして低平な島ほどそうした傾向が強い。冬季は、他の気候型と比べて降水量の多い方であって、冬季湿潤型と位置づけられよう。気候は温暖で、日最低気温月別平均値と月平均気温の最低（いずれも1971～2000年の平均値）は、那覇で14.3℃と16.6℃、名瀬で11.8℃と14.6℃であり、名瀬あたりがタロイモ栽培の限界地にあたるのがわかる。

琉球弧の島々においては、アワやムギを中心とする畑穀作と田芋・里芋・ヤムイモを栽培するイモ栽培が伝統的農耕の基底をなしてきた。ここではイモ類に的を絞って、黒潮ルートにおけるイモ栽培文化との関連において触れておく。

田芋とヤムイモは南方から渡来し、そのうち田芋はほぼ全域に普及したが、より暖かい温度環境を求めるヤムイモ栽培の北上・定着には限界があったと考えられる。他方、九州方面からは里芋⁶⁾と山芋が渡来した。里芋は、田芋やヤムイモと競合し、田芋栽培が盛んであった沖縄諸島（国頭地方を除く）～奄美諸島にかけての地域や、ヤムイモ栽培が盛んであった八重山諸島では劣位に立った。そして、同じ地域内でも高い島：低い島といった地形的な条件によって栽培作物はかなり異なる。結局、サトイモ類の分布状況（図6）ならびに栽培様式と儀礼の比較から、大隅諸島では里芋、沖縄島ではタロイモ（田芋）が卓越し、トカラ列島～奄美諸島では里芋とタロイモが拮抗していて、トカラ列島辺りがタロイモと里芋の交会地域となっていると総括できよう。筆者（1994, 87-91）はその点を踏まえて、本来、琉球弧の島々は田芋栽培地域

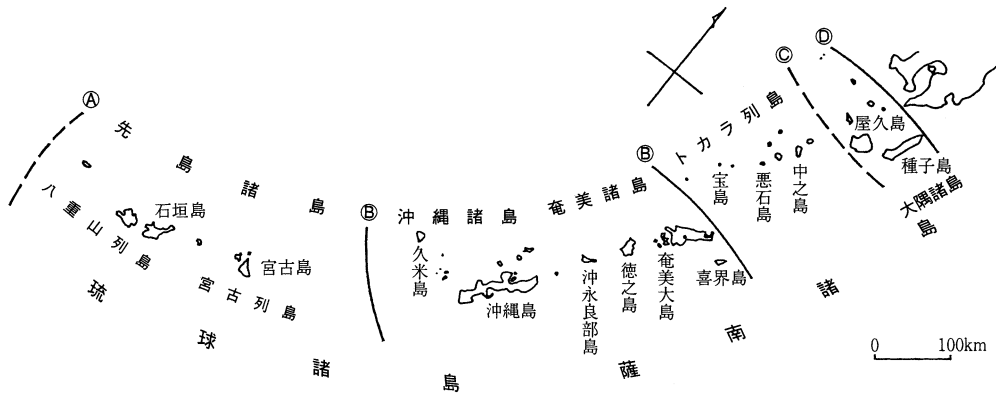


図6 琉球弧の島々の概要と田芋・サトイモ栽培圏

①：サトイモ栽培南限 ②：田芋栽培卓越圏界 ③：サトイモ栽培卓越圏界 ④：田芋栽培北限

であったが、後から里芋が入ってきて畑作地域を中心に普及したとみている。

ヤマノイモ類の種の分布については、吉成・庄武（2000, 235-310）が次のように述べている。栽培ヤマノイモの大部分はダイジョウで、その分布域は南西諸島全域から南九州にまで及ぶが、トカラ列島以北地域ではリュウキュウヤマノイモと呼ばれることからわかるように、その伝来は新しいとみられる。その点を踏まえれば、ダイジョウの伝統的栽培圏は奄美大島あたりまでとみられる。その他に、トゲドコロ（タマゴイモ, *Dioscorea esculenta* (Lour.) Burkill var. *spinosa* Prain et Burk）という熱帯系の栽培種が先島諸島から沖縄島にかけて栽培されていたが、今日ではあまり栽培されていない。自生種であるキールンヤマノイモ（*Dioscorea pseudo-japonica*）の利用の北限は奄美大島である。以上からわかるように、ヤマノイモは先島諸島、沖縄諸島、奄美諸島に分布するが、北に行くにしたがってその栽培は少なくなる傾向にある。それに対して、温帯種の山芋は奄美大島以南ではその利用の報告をみないという。したがって、南西諸島においてはヤマノイモは南方から、山芋は北から普及したものと考えられる。

次に、黒潮ルートに沿う農具の類縁関係について若干言及しておく。琉球独特のヘラ系とクシ系の農具は先島諸島からトカラ列島の口之島あたりまで分布し、その分布の中心は沖縄諸島にある（下野, 1981, 20）。八重山諸島・蘭嶼・バタン島についてみれば、イモ・粟作の農具としてクシ型とヘラ型の掘り具がセットで使われていることがわかる。このうち、クシ系の掘棒はやや小ぶりで蘭嶼のヤミ族（徐, 1986, 73-81. 奥田他, 1941, 15）や太平洋諸島で広く使われている掘棒と形態的にも機能的にも類似している。一方、ヘラ系農具は畑での除草・植え付・覆土といった作業に向い

た農具である。そのことから判断すると、田芋収穫の本来的な収穫具はクシ系掘棒であり、ヘラ系掘り具は畑作からの転用であると考えられる。国分(1981, 184)は、八重山諸島で使われている鉄製ヘラが同地出土のヘラ系石器と類似していること、このヘラ系石器が台湾出土のバツ系石器に通じる可能性のあることを指摘している。そして、蘭嶼で広く使われている有稜のイモ掘棒カカリは八重山で出土する有稜石器に類似するところがある。国分(1986, 181-203)はこうした道具や炉を使うような類の食料を生産する農業様式がこれらの地域で繰り広げられたことを物語るとして、それらの地域が南方文化の流れを汲むことを示唆している。こうしたクシ型やヘラ型農具分布の空間的連続性と時代性は、琉球弧の島々における田芋栽培が畑作とともに南方文化と関わって行われてきたことを示唆するものとして受け止められよう。

以上の検討から大きくは、サツマイモ導入以前のイモ系作物としては、先島諸島ではヤムイモ、沖縄諸島では田芋、沖縄島北部～奄美諸島・トカラ列島では田芋と里芋、大隅諸島では里芋が主作物として栽培されていたといえる。しかし、ヤムイモとタロイモは根栽農耕の基幹作物であり(中尾, 1966, 22-58)、太平洋諸島では、いずれかの作物に重点が置かれているということはあるけれども、片方の作物が全く、あるいはほとんど栽培されないということはない。その点で、ヤムイモが沖縄諸島や奄美諸島の伝統的農耕体系ではマイナーな存在であり、また大隅諸島ではしっかりと根付くに至らなかった点が注目される。その点については前述のように、ヤムイモは田芋よりも寒さに弱く、より高い温度条件を求めるため、大隅諸島で安定的栽培を行うことが困難であったからではないかと考えているが、この点についての研究が現段階ではあまり進んでいないので、その要因の解明については、今後の進展を待って、改めて検討したい。

むすび

黒潮ルートに沿う根栽農耕の分布にみられる連続性と非連続性に注目して、その連続性の重要な要の一つである台湾南部の蘭嶼をまず取り上げて、周辺地域との関係を整理した。その結果、南のフィリピン、バタン諸島との関係が最も深いことがわかった。ただし、長い人類史の過程では他地域との関係にも留意する必要がある。特に黒潮ルートにおける蘭嶼の正確な位置を測る上では、台湾島の「原住」民諸族がその形質・儀礼・言語・農耕などの面でヤミ族との類似性や関係性が大きいことがわかれるので、相互の異同の解明が欠かせない。当然、そうした検討は日本の琉球弧の島々の根

8 黒潮ルートの根栽農耕文化

栽農耕の基底的部分とその性格を解明することにも及ぶことになる。特に、先島諸島と沖縄島における根栽農耕との関係、あるいは類似性の検討が欠かせない。そうした比較作業は、まさにフィリピン・台湾・琉球弧の島々を結ぶ黒潮ルートに沿った根栽農耕の姿をはっきりと浮かび上がらせることに繋がるであろう。

具体的には、そうした作業の一環として蘭嶼の根栽農耕、特にタロイモ栽培の実地調査を踏まえて、タロイモ栽培の実態と、そこからみえてくる蘭嶼のタロイモ栽培文化の位置づけを試みた。さらに、関係の深い南のバタン島についての調査結果も踏まえた検討を行うとともに、琉球弧の島々に関する既往の研究成果の比較総括を付け加えた。その結果を、項目別に比較・整理したのが表3（比較のため、根栽農耕が盛んなオセアニアのフィジーを付加している）である。

全体的にみると、どの地域でも概ね似通った栽培様式の下でタロイモ栽培が行われていることがわかる。それは、タロイモという湿潤環境を求める作物を、灌漑技術によって栽培環境を保証しながら、耕耘、休閒システム、掘棒といった特徴ある生産様式・農具を採り入れて周年栽培、随時収穫するという農耕体系の一般的なスタイルであるといえよう。しかし詳細に比較すると、根栽農耕体系が今なお盛んなオセアニアに属するフィジーでは、多様な耕地形態をとり入れながら多くの品種・バラエティのタロイモが活発に栽培されている。それに対して、根栽農耕圏の最北端に位置する琉球弧の島々では、数少ない品種・バラエティがよく整備された耕地で、丁寧な栽培様式に従ってしっかりと施肥をして密植栽培されている。ただし、気候的な制約があるため周年栽培・随時収穫は困難で、季節を選んで栽培されるのが一般的である。

そうした二つのタイプの間であって、蘭嶼とフィリピンにおける栽培様式は両者の中間的な性格をもち、一つのグループを形作っているように見える。すなわち、蘭嶼における栽培様式はフィリピンのものと同様に、植え付け時期などで季節性が現れていたり、相対的に品種やバラエティの少ない点などでは琉球弧の島々に通じる面も認められる。その意味では、蘭嶼はフィリピンと台湾島・琉球弧の島々を結ぶ位置にあるといえよう。そして、大きくはアジアからオセアニアにかけて広がる根栽農耕圏におけるタロイモ栽培圏の範疇の中に位置づけられることは確かである。

蘭嶼からバシー海峡を隔てた南側のフィリピンにはヤミ族と民族的にも文化的にも同類とみられる人々が居住するバタン諸島が連なっている。ここでも、ヤマノイモ類、サトイモ類を中核とする根栽農耕が営まれている。ただし、灌漑耕作を伴うタロイモの栽培はみられない。それが水文条件を始めとする環境の差違に由来するのか、それとも別な要因が作用しているのかについては、今後の課題としなければならない。と

表3 太平洋地域におけるタロイモ栽培の諸相

地域		南西諸島	蘭 嶼	フィリピン	フィジー
一般	耕地形態	M, P, T	P, T, (M?)	M, P, T	D, I, M, P, T
	品種の多寡	少	少	中	多
準備	耕 耘	◎	◎	◎	◎
	足踏み耕	○	?	?	◎
	施 肥	◎	○	○	○
	灌 溉	◎	◎	◎	◎
植え付け時	苗の種類	カット苗・子芋	カット苗・子芋	カット苗・子芋	カット苗・子芋
	時 期	冬・春・夏	随時(夏季回避)	随 時	随 時
	正条植	◎	△	△	×
	植え付け密度	密	密	密	粗
	灌 溉	◎	◎	◎	◎
	肥料(緑肥)	△	△	△	△
育成中	除 草	△	△	△	△
	施 肥	×	×	×	×
	灌溉制御	◎	△	△	○
	マルチング	?	?	?	○
収穫	時 期	冬・春・夏	随 時	随 時	随 時
	方 法	部分・全面	部 分	部 分	部 分
	灌 溉	△	△	?	△
その他	農 具	掘棒・ヘラ・クシ	掘棒・ヘラ・クシ	掘棒・ヘラ	掘棒・突棒
	連 作	○	△	?	△
	休 閑	◎	△	?	○
	サトイモ科他属	(Ai), Am, Ca, Cg	(Ai), Ca, Cc, Xs,	Ca, Cc	Ai, Cc, Xs
	畦植え	△	Am○	○	◎

注1: 基本的に、伝統的な栽培様式を取りあげた。そのため、詳細にみれば、表示された特徴とは異なる側面がみとめられることもある。

2: 各事項について;◎は該当(高度), ○は該当(中程度), △は該当(低度), ×は非該当を意味する。

3: 耕地形態; D=溝田型, I=揚田型, M=マウンド型, Pi=ピット型, P=平地水田型, T=棚田, なお、蘭嶼については、マウンド型の確認がとれていないので、?とした。

4: Ai = *Alocasia indica* (Roxb.) Schott = ビアマラ

Am = *Alocasia macrorrhiza* Schott = クワズイモ

Ca = *Colocasia esculenta* (L.) Schott var. *antiquorum* = 里芋(温帯種)

Cc = *Cyrtosperma chamissionis* (Schott) Merrill = ビアカナ

Cg = *Colocasia gigantea* Schott = ハスイモ

Xs = *Xanthosoma sagittifolium* (L.) Schott = タニア

各地域の主たるものをあげた(フィジーについてはAmの有無が不詳)。

5: 本表は従来の筆者発表のものを見直した改訂版である。まだまだ決定版というわけにはいかない。

もあれ、バタン諸島はタロイモ灌溉耕作圏における不連続な部分に当たるようにみえる。そうした範疇の不連続は、ルソン島北部においても認められる。例えば、灌溉されるタロイモ栽培は山岳地帯のイフガオ(*Ifugao*)族などの居住地域ではあまりみられ

ないが、カガヤン (Cagayan) 谷を下っていくとあちらこちらにみられるようになる。

今日においてはそうした不連続部分が各所にみられるものの、大きな目で連続する部分をつないでいけばフィリピン北部も黒潮ルートに沿う根栽農耕圏に位置づけることができよう。そのことは、北に連なる蘭嶼 ⇔ 台湾島 ⇔ 琉球弧の島々の関係についても当てはまる。例えば、根栽農耕地域として同一にみえる琉球弧の島々において、中・南部地域では熱帯性のタロイモとヤマイモが優勢であるのに対して、奄美諸島以北の地域では温帯性の里芋が卓越するようになる。そして、同じ中・南部にあたる沖縄諸島・先島諸島の中でも、タロイモ栽培やヤマイモ栽培の卓越度において地域的差異あるいは不連続な面がみられる (橋本, 2001, 318-322)。そうした差違には、文化伝播の方向性や地形・水文条件といった自然環境の差違も関与している。また、先島諸島の南に続く台湾島でも、黒潮に沿う東部地域を占める「原住」民諸族がサトイモ類などの塊茎作物を栽培してきた。ただし、今日では根栽農耕の面影は薄れてしまっていることも事実である。しかし、アミ族やパイワン族などが居住する一部の地域ではサトイモ類の栽培が継承されており、この地域が根栽農耕圏に属してきたことを物語っている。

こうした黒潮ルートに沿うタロイモ栽培を始めとする根栽農耕の連続、非連続の諸相、特に非連続な面については、絶対的な断絶というよりも自然条件の差違や歴史的な経緯、文化継承条件の差違などがによるものも少なくないと考えている。ともあれ、この連続・非連続の意味については、3地域に関する検証の深化と、より広域な資料収集をまって検討したい。

[付記] 本稿は、先に発表した「台湾蘭嶼におけるタロイモ栽培」(2007年、東西学術研究所紀要 40、55-77)と「タロイモの栽培と伝播—日本・台湾・フィリピンの文化邂逅—」(2007年、関西大学東西学術研究所編『アジア・世界をつなぐ海の回廊—文化の出会い—』、181-202)、および科研報告書『黒潮ルートのイモ栽培文化—琉球弧の島々と台湾—』(課題番号: 17520549、研究代表者: 橋本征治)をベースに取り纏めたものである。

注

- 1) 2倍体と3倍体の種の間の変異はまみられるという。
- 2) この九族分類法は、旧台北帝国大学土俗・人種学研究室(1935, rep. 1966)で、移川子之藏、宮本延人、馬淵東一らがこの分類法を用いたことに発する。
- 3) かつて、Ivatas または Iwatas と呼ばれる集落があった。なお、この集落名はイヴァタン族と

第3部 島社会と外界との文化邂逅

の関連性をうかがわせる。

- 4) 1594年の大飢饉の際に陳經綸が時の知事に救荒作物としてサツマイモの栽培奨励を建言したという説がある。
- 5) 中国語では、アワの大小により、大きなものを粱、小さなものを粟とする。なお、小米は俗語である。日本で栽培されているアワは大部分が大粟であり、両者をひっくるめて粟と呼んでいる。なお、鹿野(1942)は、東南アジアにおける穀類分布に関する研究において、粟の分布地域が非常に広くて、その分布の東限線は台湾とフィリピンの東から始まって、南にあるハルマヘラ(Halmahera)島、さらにニューギニア島を迂回する形で、アルー諸島(Kep Aru)辺りまで伸びているとしている。それ以外にも、ミクロネシアのパラオ諸島(Palau Is.)などでも粟の耕作が認められることを付け加えておこう。
- 6) 安溪(1998, 100)は照葉樹林帯で栽培化された温帯性の里芋が西日本に伝わり、九州方面から南西諸島に伝わったとみている。

参考文献

- 衛惠林・劉斌雄(1962):『蘭嶼雅美族的社会組織』, 中央研究院民族学研究所。
- 大林太良(1961):『フィリピンにおけるタロイモ栽培—フィリピンに塊茎類栽培文化層は存在したか?—』, 東洋文化研究所紀要 23, 215-276。
- 奥田彥・岡田謙・野村陽一郎(1941):『紅頭嶼ヤミ族の農業』, 太平洋協会編『大南洋文化と農業』, 325-372, 河出書房。(他に財産制, 社会組織, 労働と漁撈の論文あり)。
- 鹿野忠雄(1942):『東南亞細亞民族学先史研究』(上巻), 矢島書房。
- 鹿野忠雄(1952):『東南亞細亞民族学先史研究』(下巻), 矢島書房。
- 夏本奇伯愛雄(周宗徑)(1994):『雅美族の社會與風俗』, 臺原出版社(台北)。
- 国分直一(1986):『海上の道—倭と倭の世界の模索—』, 福武書店。
- 国分直一(1992a):『北の道, 南の道—日本文化と海上の道—』, 第一書房。
- 国分直一(1992b):『日本文化の古層—列島の地理的位相と民族文化—』, 第一書房。
- 小西達夫(2003):イモ, CAS ニューズレター No.119, 9-11。
- 小林 仁(1984):『サツマイモのきた道』, 古今書院。
- サウアー, C.〈竹内常行・斎藤晃吉訳〉(1984):『農業の起源』, 古今書院。
- 坂井健吉(1999):『さつまいも』, 法政大学出版局。
- 佐々木高明(1970):『熱帯の焼畑』, 古今書院。
- 佐々木高明(2003):新・海上の道とYAMI文化, CAS ニューズレター No.119, 5-7。
- 徐 瀛洲(1986):『紅頭嶼ヤミ族の掘棒, えとのす』, 20, 73-89。
- 徐 瀛洲(1999):『蘭嶼之美』, 行政院文化建設委員会(台北)。
- 台北帝国大学土俗人種学研究室(1996, 初版1935):『台湾高砂族系統所屬の研究』, 南天書局(台北)。
- 達西拉彎・畢 馬(田 哲益)(2002):『台灣的原住民達悟族』, 台原出版社(台北)。
- 中央研究院民族学研究所(1993):『民族学研究所資料彙編』, 中央研究院民族学研究所。
- 陳 玉美纂修(2001)『台東県史—雅美族篇—』, 台東県政府文化局(台東)。
- 陳 奇祿(1992):『台湾土著文化研究』, 聯経(台北)。
- 陳 正祥(2001):『台湾地名辞典』, 南天書局(台北)。

8 黒潮ルートの根栽農耕文化

- 鄭 漢文 (1996) : 雅美族的民俗植物, 東台湾研究 創刊号, 67-104。
- 鄭 漢文・呂勝由 (2000) : 『蘭嶼島雅美民俗植物』, 地景企業股分 (台北)。
- 中尾佐助 (1966) : 『栽培作物と農耕の起源』, 岩波書店。
- 農業委員会台湾農家要覧増修訂再版策劃委員会編 (1995) : 『増修訂再版台湾農家要覧—農作物篇 (一)—』, 財団法人豊年社。
- 橋本征治 (2001) : 日本の農耕文化とイモ栽培—南方の視点から—, 関西大学東西学術研究所創立五十周年記念論文集, 313-326。
- 橋本征治 (2002) : 『海を渡ったタロイモ—オセアニア・南西諸島の農耕文化論—』, 関西大学出版部。
- 橋本征治 (2004) : 日本の先史文化と周辺地域—南方の視点から—, 東西学術研究所紀要 37, 49-67。
- 橋本征治 (2007) : 台湾蘭嶼におけるタロイモ栽培, 東西学術研究所紀要 40, 55-77。
- ベルウッド, P. <植木武・服部研二訳> (1989) : 『太平洋—東南アジアとオセアニアの人類史—』, 法政大学出版部。
- 松田正彦 (2003) : 日本のサトイモ—系譜と現在—, 吉田集而・堀田満・印東道子編 (2003) 所収, 141-150。
- 森口恒一 (2003) バタニク諸語とヤミ文化, CAS ニューズレター No.119, 32-33。
- 余 光弘 (2004) : 『雅美族』, 三民書局 (台北)。
- 余 光弘・董 森永 (1998) : 『台湾原住民族史: 雅美族史篇』, 台湾省文献委員会 (台北)。
- 吉田集而・堀田 満・印東道子編 (2003) : 『イモとヒト—人類の生存を支える根栽農耕—』, 平凡社。
- 吉野熙道 (2003) : 「サトイモ—進化の一断面と根栽農耕における位置—」, 吉田集而・堀田満・印東道子編 (2003) 所収, 121-139。
- 李 素馨総編輯 (2005) : 『蘭嶼海岸遊憩憩憩規劃』, 台東県政府 (台東)。
- 渡部忠世 (1983) : 『アジア稲作の系譜』, 法政大学出版局。
- Harris, D. R. (1973) The Prehistory of Tropical Agriculture: An Ethnoecological Model. In C. Renfrew (ed.) *The Explanation of Culture Change: Models in Prehistory*. Duckworth, London, 391-417.
- Kano, Tadao and Koukichi Segawa (1956, Orig. 1945) *An Illustrated Ethnography of Formosan Aborigines*, vol.1: *The Yami* (Revised ed.), Maruzen Company, Tokyo.
- Kolb, A. (1942) *Die Philippinen*, Leipzig.
- Philippine Council for Agriculture and Resources Research and Development (1984) *Data Series on Root Crops Statistics in the Philippines*, National Science and Technology Authority.
- Purseglove, J.W. (1972) *Tropical crops: Monocotyledons*, Longman House, Harlow.
- Yen, D.E. and J.M. Wheeler (1968) Introduction of Taro into the Pacific: The indication of the chromosome numbers. *Ethnology*, 7, 259-267.